

「コロナ時代の新歓」

廣谷泰斗(班長) 原田貴文(副班長) 谷口渚(記録)

平川沙和(接続) 松本太郎(渉外)

担当教員：甲斐田直子 TA：御手洗陽

【背景】

昨年度末から、コロナウイルスが私たちの生活に多大な変化をもたらした。日本全体で見ても、「外出を控えた」「人混みを避けた」など、環境が変わったことが分かっている。生活様式や授業様式が劇的に変化し、大学生のみならず多くの活動に制限がかかるようになってしまった。このような社会的背景の中で大学もその形態を変えた。入学式の中止や課外活動の禁止などだ。そのうちの一つがオンラインで授業を行うものだ。高校などは緊急事態宣言が明けた直後から対面での授業が再開していたが、大学は今でもほとんどの授業がオンラインで行われている。このような状況のため、新入生は新たなコミュニティを形成する場として対面授業を利用することができず、他人との付き合いの機会が非常に減少した。「大学生の幸福度と学業に対する主観的評価：アンケート調査と学業データによる分析」によると、学生の主観的幸福度を高めるものは「経済的に豊かか」「交流関係が充実しているか」「課外活動に参加しているか」であるとされている。また、「大学生の生活満足度の規定要因—大学 26 大学調査から—」では、課外活動に参加している人ほど生活満足度が高いことが分かっている。さらに、同調査からはサークルの参加動機は「親和」「自由」「健康・体力」「達成」「回避」「固執」「社会的有用性」の 7 つであるとされている。大学生活で他人とのかわりを持つ割青が大きいのはサークル活動である。このことから、大学生の幸福度にサークル活動が大きく影響を与えるのではないかと思われる。

毎年、自分に合ったサークルを探す新入生と新入生を獲得しようとする団体との間で新入生歓迎会（以下新歓とする）が行われていた。しかし、今年度はコロナウイルスの影響で例年通りの新歓が行うことができなかった。そのため筑波大学含む多くの大学の団体では、例年通りの SNS 利用だけでなく Twitter などで実施することを告知した後、zoom などで疑似的に対面で新歓を行うオンライン新歓が発生した。オンライン新歓をする側のメリットとしては、一度の新歓でより多くの新入生に団体紹介ができるため人手がかからないことが挙げられるが、デメリットとしては聞き手からの反応が薄いため一方的に話すだけの新歓になってしまう可能性がある事、新入生側のメリットは足を運ばずに様々な団体の新歓

に参加できること、デメリットは新入生同士の交流ができないことと、全体の雰囲気がつまみにくい点が挙げられる。

【目的】

- 1 コロナウイルス発生直後から先日までにかけて、新入生歓迎会（以下新歓とする）がオンライン・対面で行われていた。その実態を調査し、コロナウイルス時代における新歓活動の新しい形を探り、最適解を示す。
- 2 今年の新歓は大学の授業同様、オンラインで行われていた。そのため新入生が体験などをする機会が長い期間得ることができなかった。また、サークルによって情報量に格差があり、雰囲気が伝わり切らず、あまり吟味せずに参加する新入生もいたと思われる。このような体験・対面接触をすることができない状況で新入生が自分に合ったサークルを見つける方法がないか探る。
- 3 コロナウイルス感染拡大防止のために大学は様々な対応策を実施した。しかし、これから先第三波が発生した場合や来年度の新歓活動、さらに活動の制限の範囲など、大学側が対応しなくてはならない可能性がある。その場合、学生のためになるような対応がどのようなものになり得るのかを探る。

【調査概要】

1

対面での新歓活動が行えなかったため今年度はSNSを利用した新歓が活発に行われていた。ZOOM等が多く利用されていたが、筑波大学では特にTwitterが利用されていた。そのため新歓の活動実態を探るため各団体の公式Twitterを調査し、どのような活動を行っていたのかを時系列にまとめる。

2

新歓を実施する側も昨年度までとは形態が大きく変化し、様々な悩みや問題があったと思われる。そのため「体育会部活」「体育会同好会」「芸術系サークル」「文科系サークル」「一般体育」「一般芸術」「一般文化」の7団体に分類し、ヒアリング調査を実施した。大学からの活動自粛要請もあったため、どの団体も課外活動は行っていなかった。しかし、一部ではSNSで発信せずに対面で行っていた団体もあるようだった。そのようなSNSでは公開できない情報を実際に各団体にヒアリングして時系列にまとめる。

3

大学側は先ほど述べたように、様々な対策を行っていた。その中には学生側の活動を大きく制限するものも少なくなかった。また、小中高校などとも制限の度数が大きく異なっていた。そのため、大学側がどのような意図で対策を講じたのか、どのような事情があったのかを学生生活課にヒアリングし、意図を探る。

4

新入生・現役生にサークルなどに入会する動機などについてアンケート調査を実施し、コロナウイルスによって団体の存在意義が変化した可能性についても調査する。

【ヒアリング結果】

1・2 以下が各団体の公式 SNS の利用、及び団体へのヒアリングから得られた活動記録である（左から順に体育会部活動・体育会同好会・一般サークル・芸術系サークル）。どの種の団体も 4 月に活動を停止しているが、それぞれ活動の再開時期と新歓開始時期に差が見られた。体育会部活動は新歓活動を行わなくても新入生が加入するため新歓を行ってなかった。また、体育会同好会は一般サークルと同様に新歓活動を行っていた。活動再開時期のずれの原因は体育専門学群の存在が大きいことも大学へのヒアリングから分かった。

日付	活動内容	日付	活動内容	日付	活動内容	日付	活動内容
		4/1	活動休止			3/17	オンライン新歓
		4/11	自主練習開始	4/8	活動休止	3/18	新歓PV公開
		4/26	オンライン新歓参加	4/26	メンバー紹介		新歓用ブログ連載開始
		4/28	仮入団開始			4/1	活動休止
4/7	活動停止	5/14	オンライン新歓				
4/17	ツイッターでスタッフ募集	5/19	他サークルと合同オンライン新歓				
				5/24	オンライン新歓	4/29	メンバー紹介開始
5/10	筑波大学関係の体育会合同オンライン新歓に参加 (zoom)	6/1	本入団開始	5/31	オンライン新歓	5/10	筑波大学関係の体育会合同オンライン新歓に参加 (zoom)
				6/3		5/17	オンライン新歓
		6/15	新入生オンライン練習参加	6/13		6/14	オンライン新歓
		6/21	オンラインボードゲーム会	6/15		6/29	女性限定オンライン新歓
8/12	活動再開	7/18					
8/14	公式ブログにて新入生紹介	8/1		7/29	新入生の住んでいる地域調査		
				8/6		9/1	活動再開(火曜以外)
		9/25				9/2	1年生が練習に参加
		10/27	対面練習開始	10/3	活動再開	9/15	対面新歓開催

3 学生生活課学生支援チームの方にヒアリングを行った。学生支援チームの方々には当初 30 分を予定していたところ、1 時間半ものお時間を割いていただき、貴重なお話を聞くことが出来た。まず、大学が課外活動再開に慎重になった事情や、学生の課外活動について、どのような考えを持っているのかについては、大学では授業と課外活動は別物であり、部活動などの体育会系、芸術系、文化系団体は大学の管轄となる一方で、一般サークルは学生が運営する団体となり、その活動に学生が責任をもつことになる。つまり、大学の対面授業で学生が指示に従って受講していたにもかかわらずクラスターが発生した場合、大学が責任をとることになるが、サークルでクラスターが発生した場合、そのサークルの学生が責任をとることになる。その場合、他大学の事例にもあったように、学生個人が誹謗中傷されるこ

となり、大学が学生をまもることが出来なくなってしまうという事情だった。また、対面授業については、大学生は高校生などに比べ行動範囲が広いこと、時間的猶予が多いため感染リスクが非常に高いことを挙げられていた。

ここまでで大学が抱えるジレンマが見えてくる。大学は学生の感染を防ぐことだけを考えているのではなく、学生に友人と会う機会や友達を作る機会を作ってあげたいと思いつつも、クラスターが発生した場合や、それによって学生が誹謗中傷にさらされることを考えると安易な決定はできないというものだ。しかし、サークル活動の再開は10月からとなった一方で、体育会の部活動は8月に再開する団体もあった。これは体育専門学群の学生の中には活動が将来キャリアに影響する選手も多くキャリアに直結する可能性が十分にあると判断し、8月に特例として活動再開願を受け付け、審査会を経て40団体65件が受理されたことが理由であった。しかし、活動再開願は開催される大会に出場することが確定している団体のみ提出が許可され、大会が中止となった団体の提出は許可されなかったことも分かった。

最後に、オンライン新歓に対する大学の意見を聞いた。オンライン新歓については大学は禁止しておらず、むしろ感染リスクがない中で新入生にとって先輩や同級生と関わりを作ることが出来るいい機会として推奨する気持ちだったとのことだった。また、今後のオンライン新歓の可能性として、大学側はオンライン新歓のサポートは行っていただけるかという質問に対しては、オンライン新歓の整備は大学ではなく全代会が主催して行っているものなので大学が主導して行うことはないが、要請があれば全力でサポートしたいとのことだった。

【今後の予定】

中間発表までで新歓をする側の意見を聞くことができ、現状を理解できた。今後は新歓される側である新入生からの意見やオンライン新歓を含む今年の新歓の感想を聞き、新歓の最適解を探して最終的な提言につなげていく。そのための調査として「新入生・現役生・各サークルへのアンケート」「加入者数と対面新歓の相関」が挙げられる。

【参考文献】

佐々木 俊一郎・山根 承子・ マルデワ グジェゴシュ・布施 匡章・ 藤本 和則(2018.3)「大学生の幸福度と学業に対する主観的評価：アンケート調査と学業データによる分析」『生活経済学研究』 Vol.47

岩田考(2014) 「大学生の生活満足度の規定要因ー全国 26 大学調査からー」『共同研究：「大学生」に関する総合的研究（Ⅱ）』

(ひらく 日本の大学) オンライン授業、憤る学生 朝日新聞・河合塾共同調査

<https://www.asahi.com/articles/DA3S14575683.html>

蔵元健太・菊池秀夫[2006]大学の組織とスポーツへの参加動機に関する研究：体育科い運動

部とスポーツ活動参加者の比較 中京大学体育学論議 47,37-48